

原作小説と映画の未だ語られざる五大相違点 — 『刑務所のリタ・ヘイワース』と『ショーシャンクの空に』 —

高橋 悟

1. はじめに

(1) 原作小説と映画

米国の作家スティーヴン・キングは1982年に中編小説『刑務所のリタ・ヘイワース』(英文原題: *Rita Hayworth and Shawshank Redemption*) を発表した。同作品は他の三つの中編小説とともに『恐怖の四季』(英文原題: *Different Seasons*) という書籍の中に収められている。ちなみに和訳版では『ゴールデンボーイ』(春夏編) と『スタンド・バイ・ミー』(秋冬編) の2分冊となっており、同作品は前者に収められている。

発表後、『刑務所のリタ・ヘイワース』はさほど注目されることなく十年以上の歳月が流れたが、この小説にいたく感銘を受けたフランク・ダラボンは自ら脚本と監督を担当し、1994年に映画『ショーシャンクの空に』(英文原題: *Shawshank Redemption*) を世に出した。この作品も封切り当初は注目を浴びなかったが、レンタルビデオを通じて国内外でその評価がじわじわと高まっていくにつれ、原作小説(以下、見出し以外の本文では「小説」と記す)にも関心が寄せられるようになった。

とはいえ、我が国の現代思想誌『ユリイカ』(2017年11月号)がキングの特集を組んだ際に彼に付けた称号は「ホラーの帝王」であり、同特集の中でもホラー小説に分類されない『刑務所のリタ・ヘイワース』にはわずかな紙幅しか割かれていない。すなわち彼の多くの作品群の中で『刑務所のリタ・ヘイワース』はいわば本流から外れた所にあつて異彩を放つ存在であると言ってよいであろう。

しかし、ダラボンはこの小説の中に大いなる人間性や慈しみの心(humanity)を見出し、並々ならぬ熱意をもって映画化を実現した(Nathan, 2019)。そして今や『ショーシャンクの空に』は説明不要なほど広く世に知れ渡り、すでに不朽の名作の仲間入りを果たしているといっても過言ではないであろう。2020年11月末時点において、Amazon社の子会社である

IMDb 社の映画ランキング (Top Rated Movies) で、この作品は『ゴッドファーザー』らを抑えて堂々の首位に君臨している。

表 1 Dawidziak による原作小説と映画の相違点

	項目	原作小説	映画
1	アンディ (主人公)	小男, 金縁メガネ	長身, メガネなし
2	レッド (親友)	アイルランド系白人	黒人
3	アンディの飲酒	年に 4 杯	断酒
4	刑務所内で鳥を飼育する囚人	名前はボルトン / 鳩を飼育 / 1953 年釈放 / 図書室係はブルックスという別人 (1952 年仮釈放 / 1953 年貧困老人施設で死亡した模様)	名前はブルックス / カラスを飼育 / 図書室係 / 仮釈放中に自殺
5	刑務所長と刑務主任	3 名の人物が所長を歴任 / 主任は心臓発作で 1957 年に死去	所長は終始同一人物 / 主任はアンディの脱獄後に逮捕された
6	刑務所長の末路	アンディの脱獄後, 惨めに足を引きずりながら退職	アンディの脱獄後, 悪事が暴かれ, 拳銃自殺
7	入所時に隠し持った現金	500 ドル以上	金額不明 (ロックハンマー等を購入)
8	アンディに暴行を働く囚人の末路	刑務官から殴打され腑抜けに / レッドはアンディが刑務官を買収したと推測	刑務主任から殴打され不具に
9	トミー (事件の真実を知る囚人)	所長と取引し口止めされ, 軽警備刑務所へ移送	法廷で真実の宣誓を誓うが所長の命令で銃殺
10	収監期間	27 年間 (1948-75 年)	19 年間 (1947-66 年)
11	監房壁のポスター	入獄から脱獄まで計 6 枚	入獄から脱獄まで計 3 枚
12	刑務所内で上映された娯楽映画	<i>The Lost Weekend</i> (1945) / パラマウント映画配給	<i>Gilda</i> (1946) / コロンビア映画配給
13	モーツァルト	なし (描かれていない)	大音量で刑務所中に放送
14	レッドらの仲間	なし (描かれていない)	7 人 (レッドを含む)
15	刑務所外の親友ジムの存在	アンディのニセの身元づくりと殖財を支援 / 郊外の石塀の根元にキャスコ銀行の貸金庫の鍵を隠す / 1961 年死亡	なし (描かれていない)

出典: *The Shawshank Redemption Revealed* (Dawidziak, 2019) をもとに筆者作成。

(2) 原作小説と映画の比較に関する先行研究

映画の評価が世界的に高いことは上述のとおりであるが、原作者のキング(2013)もまた執筆する目的を「読む者の人生を豊かにし、同時に書く者の人生も豊かにするためだ。立ちあがり、力をつけ、乗り越えるためだ。幸せになるためだ。おわかりいただけるだろうか。幸せになるためなのだ」と熱く語っている。

この言葉は、彼が1999年にメイン州でダッジ・ヴァンに轢かれて瀕死の重傷を負い、その後数度の手術と入院生活を経たのちに書かれたものである。それだけに鬼気迫るものがあるが、彼のその思いは『刑務所のリタ・ヘイワース』の執筆時と微塵も変わらないと考えられる。その証拠に彼は自らの執筆・推敲作業の一端を「本ができあがるまでに、最終的には十回以上読み、全文を暗唱し、そのときには、これ以上おかしな箇所が出てこないことを祈るようになっていいる」と表現している。この言葉からも彼が一つ一つの作品にいかに大きな情熱と労力を注いでいるかを伺い知ることができるであろう。

このように小説と映画は、作家と監督のそれぞれの思いが込められた結晶であり傑作であるといえるが、『刑務所のリタ・ヘイワース』と『ショーシャンクの空に』の両者をつぶさに比較し論考した学術文献は管見の限り見当たらない。その一方で在野の著述家・批評家である Dawidziak (2019) は両者の違いとして表1に示した15点を挙げている。これらのうちの諸点及び同表に記載されていない点に関しては追って論及することとする。

2. 原作小説と映画の概要

小説と映画ではいくつかの点で異なるもののほぼ同様の内容となっている。主な舞台は米国の東部メイン州のショーシャンクという架空の地にある刑務所である。時代設定は1940年代後半から60年代ないし70年代までである。

主人公のアンディ・デュフレーションは若くしてポートランドの大銀行の副頭取を務めていたが、妻の不貞に苦しんでいた。ある晩、彼は泥酔しつつ妻の愛人のバンガローの前まで車で行くが、結局訪問することなく引き返す。ところがその晩、何者かがそこを訪れて妻と愛人を銃撃し殺害する(真犯人は長い歳月を経て映画の後半で明らかになる)。裁判の結果、彼は無実であり

ながら終身刑を言い渡され、ショーシャンク刑務所に収監される。

同刑務所は悪辣な所長と看守らの巣窟であり、囚人間の暴行の絶えない一種の「無法地帯」であった。こうした不運や逆境に屈することなく、アンディは黙々と労役をこなしつつ、元銀行員という自らの専門性や教養を活かして徐々に周囲の信頼を勝ち獲っていく。その傍ら長年にわたり秘密裏に監房の壁から穴を掘り進め、見事脱獄を遂げる。その穴を隠すために数年おきに貼り替えられていたものがハリウッド女優のポスターであった。また最終目的地はメキシコの太平洋岸の町であった。その後、牢獄生活の中で親友になったレッドという名の囚人が仮釈放される。レッドはその間に規則を破ってあてがわれた安宿を去り、メキシコにいるアンディに会いに行く。

以上が小説と映画のあらすじである。両方ともレッドが第一人称の語り手として、この物語の記録者・進行役・解説者の役割を果たしている。

3. 既に語られている二大相違点

(1) エンディング

表1には明示されていないが、小説と映画のエンディングは異なっており、この点に関しては多々指摘されている。小説では、レッドは仮釈放中に滞在していた町からバスに乗り、車中でアンディとメキシコで再会できることを望むところで終わる。そこには明るい希望の兆しが見えているが、その一方で「どうかアンディがあそこにありますように。どうかうまく国境を越えられますように」と切に願う彼の胸中の不安も描かれている。

これに対し映画のエンディングはより明確である。レッドは無事国境を越えてメキシコに入り、最後は青空の下、白浜で船を磨いているアンディと感動の再会を果たし抱擁する場面で終わる。そこにテーマ音楽が流れ、彼らの姿がズームアウトされていくことでストーリー全体により一層の壮大さと重厚さが加えられる。

映画では撮影終了時にはメキシコでの再会シーンは収録されていなかった。しかし、その後 Darabont (2019) は配給会社や周囲から強く再考を促され、視聴者により多くのカタルシス（爽快感、心の浄化作用）を与えるため、最後は自身の判断でそのシーンの撮影・収録に踏み切った、と語っている。

(2) 刑務所外の友人の存在

表1の15番に示されているとおり、映画ではアンディに刑務所外の友人は描かれていないが、小説では極めて重要な役割を担うジムという名の支援者が登場している。ジムは第二次世界大戦におけるアンディの戦友であり、終戦後も親友であった。アンディは、ポートランドの投資会社に勤めていた彼のことを「たったひとり最後まで味方になってくれた男」と形容している。そのジムがピーター・スティーブンス（映画ではランドール・スティーブンス）という名でアンディの身代わりとなるニセの身元を作り、収監前のアンディから預かった1万4千ドルの資産を少なくとも1967年までに37万7千ドルまで殖やしていた。ジムは1961年に亡くなるが、生前に株券や債券、身分証明書類をポートランドのキャスコ銀行の貸金庫の中に保管しており、その金庫の鍵をバクストンという町の牧草畑にある石堀の根元に隠しておいた。そしてその鍵の上にはかつてアンディのオフィスの机の上で重しとして使っていた黒曜石を置いておいたのである。

このように小説では刑務所内の親友レッドのほかにも刑務所外の親友ジムがいた。これに対し、映画ではジムの存在はなく、獄中にいるアンディがひとりでの抜け道を突き、悪徳かつ強欲な所長をむしろ巧みに利用し、すべて郵送で身分証明書を作るなどして、ゼロから資産を築き上げていったのである。

4. 未だ語られざる五大相違点

表1にも示されているとおり、登場人物の容姿、出自、名前、出来事、節目となる年月等に関しては小説と映画では微妙に異なる点がある。しかしそれらは両作品に通底する、①希望（渡辺，1995；鷲巢，1995；Sánchez-Escalonilla，2005；Parse，2007；西内，2009；Grady & Magistrale，2016；Dawidziak，2019；Nathan 2019）、②友情（Darabont，1996；Magistrale，2003；黒川，2005；金澤，2017）、③宗教性（キリスト教的要素）（Kermode，2003；姜，2007；Reinhartz，2013；Dawidziak，2019；服部，2019；澤野，2020）といった大きなテーマから逸脱するほど大きな相違とは言えないと思われる。

同じように両作品の価値を減じるものでは決してないが、両作品の読者・視聴者及びファンにとって興味深いと思われる未だ語られざる事柄について、本稿の中で五点ほど論及したい。

なお、表 1 にも示されていない細かい相違は小説・映画の全編を通じて随所にみられるほか、舞台設定や登場人物の言動の抽象度をどのレベルに設定するかによってその数は変動すると考えられる。他方、映画という人の心に訴える作品を対象に、そのレベル設定を完全かつ客観的に行うことは困難と思料される。したがってここでは筆者が直観的に大きいと考える以下の五点に絞り、それぞれについて映画、小説の順に論じていくこととする。なお、前半の二つは物理的・生物学的な事柄に関する相違点であり、後半の三つは抽象的・概念的な事柄に関する相違点である。

(1) 監房

映画では囚人の監房は独房すなわち一人部屋であるが、小説では二人部屋である。このことは小説において、アンディが脱獄した 1975 年 3 月 12 日水曜日の朝に、囚人たちが監房から廊下に出て二列に並ばされたという描写から読み取ることができる。アンディがいた第五監房区には全部で 14 の監房があったが、彼だけには同房の仲間がおらず、普段は合計で 27 名が収監されていた。しかしその日の朝は 13 の監房の 26 名しか点呼に答えなかった。

また小説では、アンディが牢獄で過ごした 27 年間のうち 1959 年の 8 カ月間だけ、ノーマデンという名の半分頭のおかしい米国先住民の男が同房で暮らしたとの記述がある。その頃アンディはすでに自室の壁からトンネルを掘り進めていたが、同房者がいる期間中はその作業を中断せざるをえなかった。ノーマデンはその監房のことをどこからかともなくすきま風が入ってきて常に寒かったと述懐している。小説ではアンディが歴代の刑務所長と上手に折り合いをつけ、抜き打ち検査を免れていた最大の目的は自分の監房を「個室」にしておくことであったと記されている。

また映画ではアンディの独房は棟の一番奥にあり、彼とレッドの独房との間には二つの監房があるだけであったが、小説では同じ第五監房区にありながらレッドは六号房、アンディは十四号房であり、互いに「廊下の半分ぐらい離れていた」と記述されている。さらに毎朝行列を作って食堂に移動する際にレッドはアンディの監房の中を覗くことができたとも書かれており、アンディの監房は隅ではなくその前を看守や囚人たちが行き来する位置にあったと理解される。

以上から、誰にも気づかれずに脱獄用の穴を掘るという点においては、小

説のほうが映画よりもはるかに困難な設定にあったと考えられる。実際のストーリーにおいても脱獄までに要した期間は、映画が19年間、小説が27年間と後者のほうが長くなっている。

(2) 年齢

映画ではレッドのほうがアンディよりも年上であるが、小説ではアンディのほうがレッドよりも一つ年上である。映画ではアンディを含む新入りの囚人一行が初めて刑務所に着いた時、レッドらの先輩囚人たちがその一行の中から、その夜、誰が一番先に泣き出すかについて賭け事をする場面がある。バスから降ろされ数珠繋ぎで歩かされる群れの中にひと際弱々しそうな男を見つけ、レッドは「あの長身のお坊ちゃんに」と言ってアンディに賭ける。彼らの年齢差は映画では明示されていないが、この言葉からレッドにしてみればアンディは一介の若造にすぎなかったと理解できる。俳優の実年齢からしてもアンディ役のティム・ロビンスは1958年生まれであり、レッド役のモーガン・フリーマンは1937年生まれである。したがって、両者の外見的及び生物学的な年齢差は歴然としている。

しかし、小説ではアンディのほうが一つ年上である。レッドはちょうど20歳だった1938年に入所し、1977年3月までに仮釈放され、その年の4月23日（レッドが黒曜石の下に隠されたアンディからの手紙をバクストンの牧草畑で見つけた日）には58歳になっていた。さらに翌月のある日においても58歳のままであった。彼の誕生月と入所月は明らかにされていないが、39年を経て1977年5月時点で59歳に達していないということは彼の生誕は早くても1918年5月以降（可能性としては同年5月2日から12月31日までの間）ということになる。

これに対し、アンディは1947年9月に妻と間男を殺したとの冤罪により、1948年に投獄された時は30歳であった。彼は1948年2月末に三人の囚人によって半死半生に痛めつけられたとの記述があるほか、誕生日は9月20日であり、1975年3月12日に刑務所から煙のように消え失せた時には57歳であった。このことから彼は1917年9月20日生まれであると特定できる。

すなわち確かなことは、アンディは1917年生まれであり、レッドは1918年生まれであるということである。レッドのほうがアンディよりも入所が10年も早いこと、また小説よりも先に映画を鑑賞した方々にとっては後者

の登場人物のイメージが頭の中に残り続けることから、この小説上の「事実」を知る人は全世界的にも極めて少数と考えられる。

(3) 希望

映画の中で初めて「希望」という言葉を発したのはアンディである。ある日、彼は州議会から寄贈された中古図書類の中からモーツァルトの「フィガロの結婚」の記録を見つけ出し、それを大音量で刑務所中に放送した。それを直ちに止めるよう所長たちから警告されたにもかかわらず、止めるどころかさらにボリュームを上げたため、二週間の懲罰房に入り食らった。ようやく解放され仲間と食堂で合流したが、その時のレッドとの会話の中で、彼は「心の中には何かある。誰も奪えないある物が。君の心にも」と語り、それは何だと問うレッドに対し、「希望だよ (Hope)」と答えるのである。アンディが再び「希望」という言葉を使うのは、仮釈放後のレッドに宛てた手紙の中である。そのフレーズは映画も小説もほとんど同じであるが、映画の中では「希望は良いもの、多分最上のものだ。そして、良いものは決して消えることがない (Hope is a good thing, maybe the best of things, and no good thing ever dies.)」(アルク英語企画開発部編, 1998) となっている。

他方、小説で「希望」という言葉を最初に使ったのはレッドである。そもそも小説にはアンディが「フィガロの結婚」を流すシーンは描かれておらず、この部分はダラボンの完全な創作である。小説によれば1962年にトミーという名の囚人が入所したが、彼は偶然にもアンディの冤罪の契機となった事件の真犯人と以前別の刑務所で同房だったことがあった。彼がそのことをすべてアンディに話すとアンディは普段の落ち着きを失った。レッドは語り手として、この時まるでトミーがアンディの頭の中にある檻の鍵をよこしたかのようにであったとし、「その檻は、人間を閉じ込める代わりに虎を閉じ込めてあり、その虎は希望という名前だった」と述べている。しかし結局、このアンディの再審請求への一縷の望みはよこしまな所長によって絶たれてしまうことになる。小説の中で次に「希望」という言葉が出てくるのは映画と同じくアンディがレッドに宛てた手紙の中である。また映画も小説も最終話者となるレッドが使う言葉(動詞)はhopeである。それだけに本作品に描かれたテーマとして「希望」を挙げる人が多いことには頷けるものがある。

(4) 約束

映画ではアンディが再審請求の要望を所長にした際に却下され、暴言を吐いたとして懲罰房に入れられる場面がある。その間にトミーは所長の命令で密かに銃殺され、その後解放されたアンディは中庭の壁にもたれて座り、レッドと二人きりで話をする。アンディはいつかメキシコでホテルを開きたいと夢を語る。ひとしきり会話した後、アンディは立ち上がって去ろうとするが、自分の名を呼ばれて振り返り、そしてレッドに対し、もし君がここから出られたらバクストンの牧草地に行き、大きな樫の木につながる石垣の根元にある黒曜石を見つけ、その下に埋めてあるものを掘り出すよう約束させる。仮出所後、レッドは一般社会に溶け込めず、再び刑務所に戻りたいとさえ考え始めていたが、ある日アンディと交わしたその「約束」を思い出す。この時彼は「*Only one thing stops me. A promise I made to Andy. (たったひとつのことが俺を引き止めた。アンディと交わした約束だ)*」(アルク英語企画開発部編, 1998) とつぶやく。その後、彼はヒッチハイクをしながらバクストンに行き、とうとう黒曜石の下に埋めてあったものを掘り出す。それはアンディからの手紙と現金(メキシコへの旅費)であった。もしアンディがレッドと何の約束もせず、またレッドがその約束を思い出していなければドラマの展開は異なった様相を見せていたであろう。

これに対し、小説ではアンディとレッドはこれに類する会話を1967年10月末に運動場でしている。アンディはこの時、自分の夢を語り、外界の友人ジムの存在を明かし、彼が自分のニセの身元づくりと殖財を支援してくれたと語っている。さらにアンディの資産を取めたキャスコ銀行の貸金庫の鍵についても語ったことは先に述べたとおりである。しかし、アンディはレッドにバクストンを訪れるような約束も依頼もしていない。仮釈放後、レッドは外界での生活に苦しみ、刑務所に戻りたいと思い始めていたが、あくまでも「仕事の余暇」や「道楽」として黒曜石を探していたのであった。それはアンディを懐かしく思う気持ちの発露といってもよいであろう。アンディへの慕情と敬意を表す言葉として、彼の脱獄後に寂寥感に襲われたレッドは気を取り直しつつ、「*Some birds are not meant to be caged. (鳥籠の中に閉じ込められるべきでない鳥もいる)*」(筆者訳)という名言を小説と映画の両方で残している。

ちなみに小説ではアンディは自分のことを「最悪の事態に備えているかぎ

り、幸運を願っても害はないと知っている」タイプの人間であり、「わたしは最善を願い、最悪を予想していた—ただそれだけだ」と語っている。映画には出てこないが、これもまたけだし名言であろう。

(5) 生への執着

先に述べたとおり、映画ではアンディとレッドが中庭で二人きりで話をする場面が描かれている。この時アンディは自分の夢を語るとともにそれが実現した時にはレッドにも協力してほしいと誘う。しかしレッドはそんな話は莫迦げていると激しく突き放す。アンディはレッドの言うことを冷酷な現実として認めつつも、口元を堅く結びながら、詰まるどころ人生は二者択一であり「必死に生きるか、必死に死ぬか (Get busy living or get busy dying.)」であると告げる。この言葉は多くの批評や論評の中で繰り返し引用されているものであるが、レッドも映画の最後のほうでこの言葉を復唱する。彼はアンディから受け取った手紙と旅費を携え、仮釈放中の安宿から旅立つ時に「必死に生きるか、必死に死ぬか。まったくその通りだ」と力強く胸中で唱える。そして国境を無事越えられる保証がない中であってあえて前者の道を選び、トレイルウェイズ社のバスディーポへと向かうのである。

これに対し小説の中ではアンディはこの言葉を一度も語っていない。レッドと二人きりで話をする場面は描かれているものの、それは映画ほど迫真に満ちたやりとりではなく、ジムという友人の存在、殖財のからくり、貸金庫の鍵のことなどをつぶさに明かすに留まっている。しかし、レッドが安宿から去る時にこの言葉を発するという点では映画と同じである。

5. 考察と結論

前節では「監房」「年齢」という物理的・生物学的な事柄に関する二つの相違点と、「希望」「約束」「生への執着」という抽象的・概念的な事柄に関する三つの相違点の計五つについて述べた。

仮に「監房」「年齢」が小説に忠実に映画で描かれていたならば、際立って異なる映像を視聴者に見せていたことであろう。しかし、それらの違いはこの二作品の本質ではないと考えられる。その理由はこの二作品の根底に流れるものが「希望」「友情」「宗教性」といったより普遍的でオープンエンドなテーマだからである。いわば人類の永遠のテーマとも呼ぶべきものである。

からである。それらが樹木の幹であるとすれば、監房の構造や年齢の差異はほんの枝葉に過ぎないであろう。その本質を見抜いていたからこそ、脚本家・監督のダラボンは映画に種々のアレンジを加えたのだと考えられる。もちろんそのアレンジは小説の良さを少しも損なうことなく、むしろその良さを伸ばし深めたとさえ考えられる。なぜならば、1982年に発表されたこの小説は、1994年に公開された映画が高評価を獲得するにつれてあらためてその存在が知られるようになり、再評価されるに至ったと言ってもよいからである。

同じく「希望」「約束」「生への執着」についても、アンディとレッドのどちらが先にその言葉を発したか、どちらが相手に働きかけたのか、という問いは大した意味を持たない。二人は別個の人格ではあるが、価値観を共有できる者同士だからである。彼らの気脈は完全に通じており、どちらか一方が先にある言動をとったとしても、時間はかかるにせよ、必ずや相手はそれに賛同してくれるということを魂の奥底で分かり合えていたのでないかと考えられる。すなわちそこには揺るぎない信頼関係が築かれていたのだと理解される。

以上、本稿では小説と映画について未だ語られざる五大相違点を指摘し論述した。これら以外にも少し視点や角度を変えれば、いくつもの新しい相違点を見出すことは十分に可能と考えられる。他方、小説と映画の相違点を正確に認識しつつも、それらが持つ意味の中身や性質について考えを巡らすことは、この二作品のみならず、様々な小説や映画をより深く鑑賞していくことにもつながっていくと思料される。それはとりもなおさず私たちの人生をより豊かなものにしていくことにもつながり、そこに小説と映画の双方を多面的・多層的に味わう醍醐味もあると考えられる。

参考文献

明石陽介編 (2017) 『ユリイカ』, 第49巻, 第19号, 青土社.

アルク英語企画開発部編 (1998) 『映画で覚える英会話 アルク・シネマ・シナリオシリーズ ショーシャンクの空に』, アルク.

Darabont, F. (1996) *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York: Newmarket Press.

Darabont, F. (2019) *Nightly News with Lester Holt*, NBC,

<<https://www.youtube.com/watch?v=IZ3VIXyvRH4&t=92s>>

(閲覧日：2020年11月30日)

Dawidziak, M. (2019) *The Shawshank Redemption Revealed: How One Story Keeps Hope Alive*. Guilford: Lyons Press.

Grady, M. & Magistrale, T. (2016) *The Shawshank Experience: Tracking the History of the World's Favorite Movie*. New York: Palgrave Macmillan.

服部弘一郎 (2019) 『銀幕の中のキリスト教』, キリスト教新聞社.

Internet Movie Database (IMDb) *Top Rated Movies*,

<https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nv_mv_250>

(閲覧日：2020年11月30日)

姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.

金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編, 『午前十時の映画祭 8プログラム』, キネマ旬報社.

Kermode, M. (2003) *The Shawshank Redemption*. London: British Film Institute.

キング, スティーヴン著, 浅倉久志訳 (1988) 『ゴールデンボーイ：恐怖の四季 春夏編』, 新潮社.

キング, スティーヴン著, 田村義進訳 (2013) 『書くことについて』, 小学館.

黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない！名映画300選 (外国編)』, 中経出版.

Magistrale, T. (2003) *Hollywood's Stephen King*. New York: Palgrave Macmillan.

Nathan, I. (2019) *Stephen King at the Movies: A Complete History of the Film and Television Adaptations from the Master of the Horror*. London: Palazzo Editions.

西内誠 (2009) 「“Get busy living or get busy dying” : *The Shawshank Redemption* (1994)」, 『OLIVA』, 16, 97-155.

Parse, R. P. (2007) Hope in “Rita Hayworth and Shawshank Redemption” : A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20(2), 148-154.

Reinhartz, A. (2013) *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.

Sánchez-Escalonilla, A. (2005) The Hero as a Visitor in Hell: The Descent into

Death in Film Structure, *Journal of Popular Film and Television*, 32(4), 149-156.

澤野純一 (2020) 「ある映画における宗教の多元性について：『ショーシャンクの空に』に埋め込まれたキリスト教」, 『福祉と人間科学』, 30, 73-83.

鷺巣義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.

渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンズってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.

映画作品

『ショーシャンクの空に』 (*The Shawshank Redemption*) . Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994. Shochiku Home Video, 2007. DVD.

(本稿の中で引用したセリフは、特に記載のない場合は本 DVD の日本語字幕を採用した.)